



植柳の風

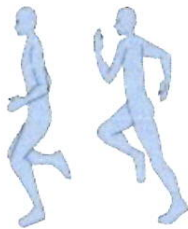
八代市立植柳小学校 校長室便り
平成31年3月4日 NO. 129

人はなぜ走るのか ～マラソンブームの将来～

まさに世はマラソンブーム。先月17日(日)に開催された熊本城マラソンでは、1万2千人のランナーが早春の香り漂う熊本の地を走り抜けたばかり。そして、昨日の3日(日)、3万8千人が参加した東京マラソンの様子をテレビ中継で拝見したが、いやはずごい数の人たちにただ驚いた。エリートランナーと呼ばれるトップ選手の様子も東京マラソン日本代表の出場権がかかっており必死に走っていたが、日本最大の規模を誇るこの市民マラソン大会は見るだけでも十分価値があった。



そもそもこの東京マラソンが始まったのは、2007年、今から12年前の話である。とこの東京都知事 石原慎太郎氏が2003年ごろから、「日本や世界中から多くのランナーを迎えることで、経済波及効果、スポーツや観光の振興につながる」と訴え、銀座、浅草などの目抜き通りを走る構想を発表。石原知事の要請を受けた東京陸連などが警備に当たる警視庁から渋滞の恐れなど、都民生活に大きな影響を与えることから制限時間を6時間以内とするなどの提案があったが、より多くのランナーが参加しやすいようにと規制が7時間に緩和されたようである。また、「東京マラソンは東京オリンピック構想のアピールも兼ねている」と石原知事は当時語っているが、来年に迫った東京オリンピックの呼び水となったことはあまり知られていないことかもしれない。

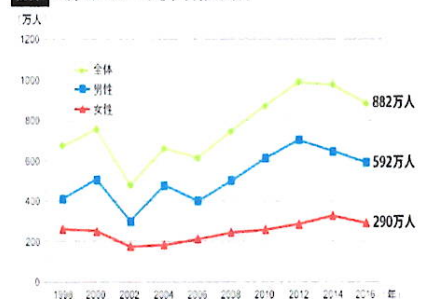


大都会や観光名所を爽快に自分の足で駆け巡る市民マラソンは、知らない土地を知る新たな観光パターンであり、しかも沿道から送られる声援や名産品等の差し入れは走ったものでしか味わえない醍醐味がある。新たな地域おこしの意義もあり、2007年から始まった東京マラソンがブームの火付け役となり、今や全国で5千人以上の参加規模を誇る大会は、約200を数えるという。ただ、ある調査によると、ブームの一方、ジョギングやランニングをする人たちは、2012年ごろの1000万をピークとし、現在は900万人に減少しているそうである。したがって、各都道府県で開催される大会も出場者にいかに選んでもらえるかが大会の成否にかかっている。

土曜日、鹿児島市内を訪れた時、日曜日に開催される鹿児島マラソンの準備が行われていた。3年前から始まった大会であるが、参加者は1万人。一方、同一時期に30年に渡って開催されてきた「種子島ロケットマラソン」はこの影響を受け、2年前に中止に追い込まれている。大会が市民を選ぶのではなく、市民が大会を選ぶ時代に間違いなくなっている。

人はなぜ走るのか、人それぞれ理由は違うと思うが、「自分が限界だと感じる世界に到達し、その向こうに見える何かを味わいたい。」という人が多いのではないだろうか。心理的限界を向上させるマラソンの魅力、自分ももう一度走りたいなとテレビ中継を見ながら思った。

図表1 ジョギング・ランニングを年1回以上する人



出典：国土交通省「平成27年度全国運動健康調査」(2015年10月～2016年1月)総務省統計局作成
注：男女別別データは総務省統計局より提供された。